

大串弘美作 「わたしの子育て奮戦記」

<前編>

- (効果音) (「おぎゃ おぎゃ 」赤ちゃんの泣き声)
- 先生 元気な男の子ですよ!
- 大野さつき ありがとうございます!
- ナレーション わたしは大野さつき。23 歳。やっと産まれた。さっきまでのあの激痛が、ウソのように消えてる。
- さつきモノローグ 何て幸せな気分なんだろう。
- 看護婦 大野さん、ほうら赤ちゃんですよ。ちょっと抱いてみる?
- さつき わあ、かわいい。白くてプクプクしてる。もっと猿みたいな赤ちゃんが産まれると思ってたのに。
- 看護婦 この子は大きかったからね。産むのも大変だったけど、でも丸々太って元気な赤ちゃんでよかったわね。
- さつきモノローグ すごくかわいい。これが本当にわたしの赤ちゃん? まだ実感がわからない。ウソみたい。
- ナレーション わたしは、慣れない手つきで赤ちゃんを抱きながら、恐る恐る赤ちゃんの白いふやけたおでこにキスをした。
- 看護婦 大野さん、ご主人ですよ。
- 大野弘樹 さつき、よく頑張ったね。ご苦労さん。
- さつき 見て、こんなにかわいい赤ちゃんだよ。抱いてみる?
- 弘樹 うん。わあー、軽いな。ちっちゃいてだなあ。これでおれもほんとにパパかよ。(涙ぐむ)
- 看護婦 あらあら、ご主人が泣いちゃって。パパにそっくりな赤ちゃんね。大野さん、ご主人に何か冷たいものでも買ってきてもらったら? まだあなたは動いちゃダメよ。あと2時間くらい、そこで寝ててね。
- ナレーション そう言うと、看護婦さんは赤ちゃんを抱いて分娩室を出ていった。
- 弘樹 さあ、お祈りしよう。
- ナレーション そう、わたしたち 2 人はクリスチャンだ。最高に幸せな気分で、わたしたちは主に感謝の祈りをささげた。二十歳で結婚して、今まで 4 回も流産した。なんでも胎盤が十分に発達してなくて、胎児が育ちにくいんだそうだ。3 年間、教会の牧師先生や、皆さんにも祈っていただいて、やっと授かった命だ。自然と涙がこぼれてきた。そのあと、わたしは分娩台の上に寝たままアイスを食べ、弘樹はわたしの横で、病院で出された夕食を食べた。手術室によくある大きな丸いライトを見上げながらアイスを食べるなんて、何か不思議な気がした。(少し間)

思えば長い一日だった。朝起きたら突然出血して、どんどん痛みが強くなってきているのに、それでも看護婦さんに「まだまだ」なんて言われて、丸一日、死ぬかと思うほど苦しんだ。

弘樹 でも、本当によく頑張ったな。分娩室の外まで苦しそうな声が聞こえてて、どうなっちゃうかと思ったよ。

さつき いきんでもいきんでも出てこなくてさ。もうダメだ! と思った時、「あ、そうだ、わたしは神様のこと信じてるから、今死んでも天国へ行くだけなんだ。ああ神様、わたしは死んでもいいから、この子だけは無事に生まれさせて!」って思ったの。そしたら不思議と力が出てきて、先生たちも、もう帝王切開じゃないとダメかなと思ってたみたいだけど、わたしの頑張っているのを見て、吸引で産ませてくれたの。

弘樹 おれもそばについていたかったのに、「とてもご主人に見せられるような状況じゃないから」って、中に入れてもらえなかったんだよな。そんなに大変だったのか。

さつき 看護婦さんと助産婦さん 3 人がかりでわたしのおなかを押して、先生が機械で下から引っ張ってさあ、今考えると、よく生きてたなって思う。

弘樹 え、あの太った...じゃなかった、あの体格のいい看護婦さんにおなか押されたの?

さつき 押されたなんてもんじゃなかったよ。ほとんど乗っかってたね。

弘樹 よかったな、生きてて。

さつき でもさあ、本当につらかったけど、赤ちゃんの顔見たら、どんな痛みだったかなんて忘れちゃった。また赤ちゃんが欲しいなんて思えるんだから不思議だよな。

ナレーション そのあと、車イスで病室に移された。陣痛の痛みは消えたものの、人工的に産道を広げて産んだわたしの体は、傷口がもう痛くて痛くて、一生歩くことなんてできないんじゃないかと思った。

看護婦 結構難産だったものね。今はとにかく眠ることよ。あと 3 時間位したら起こしに来るから、トイレに行ってみましょう。

ナレーション 「一歩でも歩くなら、トイレなんか行かなくていい!!」って叫びたかった。普通は、2 日目くらいから傷の痛みも大分収まってきて、動けるようになるらしいけど、わたしの場合、ちょっと違っていた。その日は何とか動けたものの、一夜明けると、起き上がるのもやっとなってしまった。

さつきモノローグ みんなだんだん元気になっていくのに、わたしは全然よくなる。何でこんなに動くと痛いんだろう。

先生 大野さんの場合、吸引分娩で出産したので、その分傷も大きいし、赤ちゃんが大きかったせいか、骨が少しずれてしまったのかもしいね。しばらくの間安

静にしていれば、必ず治るから心配要らないよ。

さつきモノローグ ああ神様、早く治して。早く赤ちゃんの世話がしたいよ。

ナレーション 落ち込んでいると、高校時代からの親友の伊沢あけみがお見舞いに来てくれた。彼女も2か月後に出産を控えて、大きなおなかをしている。

あけみ おめでとう、さつき。よかったね、無事に産まれて。

さつき ありがとう。でも大変だったんだよ。

あけみ 何か怖いなー。わたしももうすぐ産むなんて信じられないよ。

さつき 大丈夫、あけみにも神様がついてるからさ。

あけみ 神様ね。本当にわたしのことも助けてくれるのかなあ。ところで明日退院でしょ？

さつき ところがさあ、さつき看護婦さんに「そんなに体調が悪いんだったら、もう少し入院してたほうがいいんじゃない？」とか言われちゃってさあ。絶対退院しちゃう。もう早く家に帰りたいもん。実家の母も手伝いに来てくれるし。

ナレーション こうして次の日、わたしは強引に退院してしまったが、それが悪かったのか、傷はなかなか治らず、かえって悪くなり、熱も下がらなかった。

先生 うーん、もう一度入院して手術しないとダメかもしれないな。とりあえず飲み薬を出しておくから、あと2、3日様子を見よう。少し強い薬だから、母乳はあげないでおいてね。

さつきモノローグ (泣き声)何でわたしがこんな目に遭わなくちゃいけないの？

ナレーション 泣きながら弘樹に話して、2人で神様に「み心ならばいやしてください」って祈った。教会でも、皆さんが一生懸命に祈ってくれた。本当にどうなることかと思ったけど、幸い手術もせずに、1か月ほどでいやされ、赤ちゃんの世話もできるようになった。自分の体を自分で思うようにできず、あれほど無力さを感じたことはなかった。つくづく人間は、生きているのではなくて、生かされているんだと思わされた。

(効果音) (赤ちゃんの泣き声)

ナレーション 始めは赤ちゃんの夜泣きに悩まされていた弘樹も、大分慣れてきたみたい。わたしも、赤ちゃん中心の生活にも随分慣れて、少しはママとしての自覚も出てきた。その間、友達が何人かお見舞いに来てくれたが、なぜか頂いたのはメロンが多くて、メロンの山ができた。これも神様のお恵みと感謝して、毎日のようにメロンを食べていたある日、高校時代、合唱部の後輩だった杉原今日子が遊びに来た。

杉原今日子 先輩、子育て頑張ってますか？ これメロン、食べてください。

さつき あ、ありがとう。

今日子 げ、もしかして、それみんなメロン？ やっぱみんな考えること同じなんですね。
(笑う)

さつき ところで、どうしたのよ、突然現れたりして？

今日子 へへー。実はですね、わたしももうすぐママになることになりました。

さつき えー？ だって、今日子、まだ結婚もしてないのに。

今日子 というわけで、これから結婚することになったんです。そろそろ一緒に住みたい
なって思ってたところだったし、何か、こうやって追い込まれた状況じゃないと、
なかなか結婚なんてできないじゃないですか。

さつき あのね、結婚って、そういうものじゃないんじゃないの？ それに、子育てってそ
んなに甘くない。

今日子 そうですか？ 先輩でもできるんだから、わたしにだってできますよ。

さつき あ、そんなこと言っていていいわけ？ 大体産むのも大変なんだよ。そう言えば、昨
日あけみの予定日だったなあ。まだ連絡来ないから産まれてないのかなあ。今
ごろ苦しんでたりしてね。

ナレーション その時だった。

(効果音) (電話ベル音)

さつき はい、大野です。あ、あけみ？ 今、あけみの話してたところ。どう、産まれた？ え？
どうしたの、あけみ？

ナレーション あけみの様子がおかしい。泣いているみたいだ。

さつき あけみ、泣いてちゃ分かんないよ。

あけみ (電話 フィルター音)あのね、赤ちゃん産まれたんだけどね、心臓に...穴が開
いてるんだって。(泣き崩れる)

ナレーション 電話の向こうで泣き崩れるあけみの声を聞きながら、わたしはぼう然と受話器
を握り締めていた。

<後編>

さつき もしもしあけみ、何があったの？

あけみ (電話フィルター音)赤ちゃんの心臓に穴が...穴が開いてて...手術をしなくちゃ
いけないかもしれないの。

ナレーション わたしは大野さつき。つい2か月ほど前に、男の子のママになったばかりだ。ち
ょうど同じころ妊娠した、高校時代からの親友のあけみの出産報告を心待ちに
していたが、電話は、彼女からの思いも寄らない知らせだった。わたしは早速
病院の彼女を見舞った。

さつき それで、赤ちゃんは？

あけみ 今、大きな病院に移して検査してる。穴の大きさによって、すぐに手術するかど
うか決めるんだって。

さつき そう。でも、赤ちゃんの心臓に穴が開いているのって、よくあるみたいだよ。たい
ていは、そのままにしておいても、穴が自然にふさがって治っちゃうんだってさ。
だから大丈夫。あけみの赤ちゃんも必ず治るよ。ところでどっちだったの？

あけみ おなかにいる時、それほど暴れなかったから女かなって思ってたら、やっぱり女の子だったよ。

さつき いいなー。うちも女の子欲しいな。あけみの体のほうは平気なの？

あけみ うん。お産は軽かったから、わたしの体のほうは何ともないんだけどね…。

さつき あけみ、元気出して！ もうママなんだから、あけみがそんな調子じゃ赤ちゃんが不安になっちゃうよ。

あけみ そうだね。わたしがしっかりしなきゃね。ありがとう。

さつき じゃ、また電話して。(モノローグ)(ため息)心臓に穴かぁ…。

ナレーション もし自分の子供だったら、と思うと、胸がキュッと痛くなる。

さつきモノローグ 神様、どうかあけみの赤ちゃんの心臓が無事に治りますように。

ナレーション 検査の結果、心臓には 2 つの穴が開いていたが、それほど大きな穴ではないので、しばらく様子を見ることになった。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 育児大奮戦の半年が過ぎたころ、わたしは久しぶりに子供の大介を連れて、あけみの家に遊びに行った。

(効果音) (ドアホーン)

あけみ いらっしゃーい。

さつき 久しぶりー。お邪魔しまーす。

あけみ 大介君、大きくなったねえ。すごい、もう立つの？

さつき そうなの。足がとっても強くてね。見てよ、この太さ。この間なんかさ、ベッドの柵につかまって一人で突然立ち上がったから、びっくりしちゃった。何だかうれしくて涙が出てきちゃったよ。

あけみ そうだよ。感動しちゃうよね。うちの由香も、早く立てるようになればいいのに。まだ、やっと一人で座っていられるようになっただけなんだよ。何かあせっちゃうよ。

さつき 何言ってるの。由香ちゃんもすぐ立てるようになるよ。子供の成長なんて個人差が激しいんだから、心配しなくても大丈夫だよ。それに由香ちゃんは、大介よりも遅く生まれたのに、体が大きくてどっしりしてるから、立つのも大変なのかもよ。

あけみ そうかなあ。何かさ、このごろ不安になることばかりで…。由香の心臓はね、おかげさまでもうほとんど心配ないんだって。さつきもお二人で祈ってくれたんでしょ。ずっと？ 本当にありがとう。でもね、まだあまり無理できないし、すぐに調子悪くなるのよ。ちょっとセキしたかと思うと、あっと言う間に熱が上がるし、風邪を引くと必ず中耳炎になるし。肌はアトピーで、ガサガサだし。もうあっちの病院、こっちの病院って、ほとんど毎週病院行ってるのよ。夜はなかなか寝てくれないし…。

さつき 大変だね。少しご主人にも手伝ってもらえばいいのに。

あけみ ダメ。うちのだんななんて、何にも手伝ってくれない。由香のオムツだって替えてくれないし、仕事仕事で帰りも遅いし、家族のために働いてくれるのは分かるけど、少しはわたしの大変さも理解してくれればいいのに…。

ナレーション わたしは、何とかあけみを励まして帰ってきたが、何か心配だった。

さつき でね、あけみのご主人たら、全然由香ちゃんの面倒を見てくれないんだってさ。

弘樹 うーん。まあ仕事が忙しいということもあるだろうけど、きっと、どうやって面倒を見たらいいか分からないんじゃないの？ 自分の子供がかわいくないわけないんだからさ。母親は 24 時間子供と接してて、何が起きてても大丈夫って感じだけど、父親はさ、夜とか休みの日しか子供と接してないじゃん。たまにオムツを替えてみて、ウンチだったりすると、ぎょっとしちゃうもんね。泣かれても、何で泣いてるのか、さっぱり分かんないしさ。きっと、あけみさんのご主人も、由香ちゃんをどう扱ったらいいか分からないんだよ。

さつき そうか。そう言えば、本にもよく書いてあるよね。オムツが取り替えられないパパとか、子供の泣いている理由が分からなくて、一緒に泣きなくなっちゃったパパとかね。あけみも、もう少しご主人と話し合っって、分担できることは分担して助け合わなくちゃ、あの子、ノイローゼになっちゃうよ。

弘樹 でも、あけみさん、そんなに参ってるのか。少し気分転換が必要なんじゃないか？

さつき そう、それよそれ！ じゃあさ、今度の土曜日に今日も誘って、あけみと 3 人でカラオケにでも行って来るね。悪いけど、大介頼むわね。

弘樹 はいはい。本当に悪いと思ってるのかね。ま、楽しんできてください。

さつき わーい。早速あけみに電話しよっと。

ナレーション その時だった。

(効果音) (電話のベル)

さつき はい、大野です。ああ、今あけみに電話しようと思ってたところなんです。え、あけみが出ていった？

ナレーション 電話の主は、あけみの夫のおるだった。とうとうあけみがキレてしまったらしい。夫とケンカをして、由香ちゃんを連れて家を飛び出してしまったのだ。わたしたちは、近所を探してみた。案の定、彼女はうちの近くの公園でポツンとブランコに座っていた。

さつき あけみ、心配したんだよ。あらあら、由香ちゃんは何にも知らずに、こんな幸せそうな顔して眠っちゃって。さあ、うちに行こう。

あけみ とおるがあんまり自分勝手なこと言うもんだから、わたしもう、悔しくて...(泣く)

ナレーション わたしは、あけみを家に連れて帰ると、温かいコーヒーを飲ませた。

さつき 少し落ち着いた？

あけみ うん。今までさ、たまってた不満とかを全部ぶちまけちゃった。

ナレーション その時、彼女の夫のとおりが駆け込んできた。

とおる あけみ、悪かった。今まで仕事に逃げてたよ。子育てはお前に任せておけばいいんだって思い込んでたけど、そういうもんじゃないのかもな。実際、俺は由香のオムツさえ替えられないし、かえって何もしないほうがいいのかと思ってたけど、あけみがそんなに大変な思いをして悩んでいるなんて知らなかったよ。

あけみ 子育てって、簡単そうに見えてとっても大仕事なんだよね。わたしのような新米ママは、何でもないことに不安になったり、泣きなくなったり、赤ちゃんが泣きやまないと本当に引っぱたきなくなったりするのよ。何も、とおるに会社休んで赤ちゃんの世話してなんて言ってんじゃないの。うちに帰ってからも、オシメから洗濯まで、何でも一緒にやってって頼んでるわけじゃない。ただこの大変さを分かってほしいの。優しい言葉で、慰め励ましてくれるだけでいいのよ。それを、それを...(涙ぐむ)

さつき そうよ、とおるさん。そんな赤ちゃんの世話だけでも大変なのに、そのほかに家事もやらなくちゃいけない。それがわたしたちの仕事で、やって当たり前と言えばそうだけど、やっぱり一人では手に負えないときもあるんだよね。ご主人に助けてもらわないといけないことって、結構あるんじゃないかな。実際の家事や育児はもちろん、精神的にもね。

弘樹 何と言っても、子供は、神様が命をつられる時に、世界中をくまなくご覧になって、これだ! と選ばれた親のもとに預けられたものだからね。僕なんかも至らない父親で、偉そうなことは言えないけど、大切に精一杯育てなくちゃいけないとは思ってるんだ。そんな大切な仕事を母親だけに任せておけないよ。

あけみ 子供は神様から預けられたものか…。今まで自分のものだって思い込んでた。だから、自分勝手に悩んで、わたしにはもう育児なんてできないって思った。でも神様がわたしを選んで預けてくれたのなら、わたしにもできるってことだよ。いつでも神様が助けてくださるのかな?

さつき そう。こんな未熟なわたしたちだもの。神様の助けなしに、子育てなんてできないわよ。せっかとお預かりした大切な赤ちゃんなんだもの、夫婦 2 人でたっぷり愛情を注いで、精一杯育てなくちゃね。今日は由香ちゃんをうちで預かるから、2 人で少し話し合ってみたら? あけみも気分転換が必要なんじゃない?

ナレーション 次の日の夕方、昨日とは打って変わって生き生きとした顔で、2 人はやってきた。

あけみ 昨日はありがとう、さつき。よく話し合って、いろいろ分担することにしたの。とおるもなるべく早く帰ってきて、お風呂に入れるのにも挑戦してみるって。

さつき そう、よかったね。

とおる 今日は、久しぶりに 2 人で映画も見に行けたし。これ、お礼にお土産買って来た

弘樹 なんですけど。

弘樹 おっ、うまそうだな。

さつき うっ、ちょっとごめんなさい。

ナレーション わたしは、慌ててトイレに駆け込んだ。

弘樹 おい、どうしたんだ？ 大丈夫か？

あけみ ちょっと、もしかして2人目ができたんじゃないの？

弘樹 ほ、ほんとか？

ナレーション 驚いて見つめる夫やあけみたちの顔を見ながら、わたしはジワーッとこみ上げてくるうれしさに、思わず顔が緩んだ。一瞬、「またあの苦しい目に遭うの?」と思ったけど、いいわ、平気。また新しい家族が増えるんだもの。神様が、新しい命のママに選んでくれたんだもの。

(完)